

二人の友

森鷗外

青空文庫

私は豊前ぶぜんの小倉こくらに足掛四年いた。その初はじめの年の十月であった。六月の霖雨りんうの最中に来て借りた鍛冶町かじまちの家で、私は寂しく夏を越したが、まだその夏のなごりがどこやらに残っていて、暖い日が続いた。毎日通う役所から四時過ぎに帰って、十畳ばかりの間にすわっていると、家主いえぬしの飼う蜜蜂が折々軒のあたりを飛んで行く。二台の人力車がらくに行き違うだけの道を隔てて、向いの家で糸を縫よる車いとくるまの音が、ぶうんぶうんと聞える。糸を縫よっているのは、片目の老処女で、私の所で女中が宿に下がった日には、それが手伝に来てくれるのであった。

或る日役所から帰って、机の上に読みさして置いてあった Wundt の心理学を開いて、半ペエジばかり読んだが、氣乗がせぬので止めた。そしていつもの車の音を聞いてぼんやりしていた。

そこへ女中が知らぬ人の名刺を持って来た。どんな人かと問えば、洋服を著きた若い人と云う。とにかく通せと云うと、すぐにその人が這入はいって来た。

はたちわすか二十を僅に越した位の男で、快活な、人に遠慮をせぬ性たちらしく見えた。この人が私にそう云う印象を与えたのは、多く外国人に交まじわって、識しらず知らずの間に、遠慮深い東洋風を

棄てたのだと云うことが、後に私にわかった。

初対面の挨拶が済んで私は来意を尋ねた。この人の事を私はF君と書く。F君の言う所は頗る尋常に異なるものであった。君は私とは同じ石見人であるが、私は津和野に生れたから亀井家領内の人、君は所謂天領の人である。早くからドイツ語を専修しようと思いつて、東京へ出た。所々の学校に籍を置き、種々の教師に贅を執つて見たが、今の立場から言えば、どの学校も、どの教師も、自分に満足を与えることが出来ない。ドイツ人にも汎く交際を求めて見たが、丁度日本人に日本の国語を系統的に知つた人が少いと同じ事で、ドイツ人もドイツ語に精通してはいない。それから日本人の書いたドイツ文や、日本人のドイツ語から訳した国文を涉猟して見たが、どれもこれも誤謬だらけである。その中でF君は私が最も自由にドイツ文を書き、最も正確にドイツ文を訳すると云うことを発見した。しかし東京にいた時の私の生活はいかにも繁劇らしいので、接近しようとせずにいた。その私が小倉へ来た。そこで君はわざわざ東京から私の跡を追つて来た。これから小倉にいて、私にドイツ語を学びたいと云うのである。

これを聞いて私はF君の自信の大きいのに驚き、又私の買ひ被られていることの甚しいのに驚いて、暫く君の顔を見て黙つていた。後に思えば気の毒であるが、この時は私の心

中に、若し狂人ではあるまいかと云う疑きえ萌していた。

それから私は取敢ずこんな返事をした。君は私を買い被っている。私はそんなにえらくはない。しかし私の事は姑く措くとして、君は果して東京で師事すべき人を求めることの出来ぬ程、ドイツ語に通じているか。失敬ながら私はそれを疑う。こう云いつつ、私は机の上にあつた Wundt を取つて、F 君の前に出して云つた。これは少し専門に偏つた本で、単にドイツ語を試験するには適していぬが、若しそれでも好いなら、そこで一ペエジ程読んで、その意味を私に話して聞かせて貰いたい。若し他の本が好いなら、小説もあり雑誌もあるから、その方にしようと云つた。

F 君は私の手から本を受取つて、題号を見た。そして「心理学ですな」と云つた。

「そうだ。君それが読めるか。」

「読めないことはありませんまい。この本の事は聞いていただけで、まだ見たことはなかったのです。しかし私が Paedagogik を研究した時、どうしても心理学から這入らなくては駄目だと思つて、少し心理学の本を覗いて見たことがあります。どこを読みましょう。」
 こう云つて本を翻しているうちに、巻末に近い Die Seele と云う一章が出た。「そこを少し読んで聞かせ給え」と、私は云つた。

F君は少し間の悪そうに、低い声で五六行読んだ。声は低いが発音は好い。すらすらと読むのを私は聞いていて、意味をはつきり聞き取ることが出来た。

「もう好いから、君その意味を言つて聞かせ給え」と、私は云つた。

F君は殆ど術語のみから組み立ててある原文の意味を、苦もなく説き明かした。

私は再び驚いた。F君は狂人どころでは無い。君の自信の大きいのは当然のことである。私は云つた。

「それだけ読めれば、君と僕との間に、何の軒輊けんちすべき所も無いね。」

「なに。そんな事はありません。追々質問します」と、F君は云つた。

これでF君が漫みだりに大言莊語そうごしたのでないと云う事だけはわかつた。しかしそれ以外の事は、私のためには総て疑問である。私はこの疑問を徐々に解決しようと思つた。只その中に急に知らなくてはならぬ事が一つある。それはF君の生活状態である。身の上である。私はこう云つた。「それは君のドイツ語を研究する相談相手になれと云うことなら、僕はならないことはない。ところで君はどうして小倉で暮して行く積りだ。」こう云つたが、

F君は黙っている。私はすぐに畳み掛けて露骨に云つた。「君金があるのか。」

F君は黙つてはいられなくなつた。「金は東京から来る汽車賃に皆使つてしまつたので

す。国から取れば、多少取れないこともありませんが、目前の用には立ちません。当分あなたの所に置いて下さるわけには行きませうまいか。」

この詞は私の評価に少からず影響した。F君のドイツ語の造詣ぞうけいは、初め狂人かと思つた疑を打ち消して、大いに君を重くしたのに、この詞は又頗る君を軽くした。固もとより人間は貧乏だからと云つて、その材能さいのうの評価を減ずることはない。しかしF君が現に一錢たぐわえの貯もなく、私をたよつて来たすると、前に私を讃めたのが、買被りではなくて、世辞ではあるまいか、阿諛あゆではあるまいかと疑われる。修行しようと云う望のぞみに、寄食しようと云う望が附帯しているとすると、F君の私を目ざして来た動機がだいぶ不純になつてしまふ。人間の行為に全く純粹な動機は殆ど無いとしても、F君の行為を催起した動機は、その不純の程度が稍甚やぶなほだしくはあるまいかと疑われる。

これまで私に従学したいと云つて名告り出た人に、F君のような造詣のあつたことは曾かつて無い。この側から見れば、F君は奇蹟である。しかしこれまで私の家に寄食したいと云つて来た人に、一文の貯もなかつたことは幾らでも有る。この側から見ればF君は平凡なぎようこうしゃ傲幸者である。そう云う傲幸者を遇する道は、私のためには熟路である。私はこの熟路を行くに、奇蹟たる他の一面を顧慮して、多少の手加減をすれば好いのである。

私は決して徼幸者に現金をわたさない。これが徼幸者に対する一つの原則である。そこで私はF君にこんな事を言った。君はドイツ語が好く出来る。私の君を知っているのは只それだけである。それだけでは、君と同居しようとはまでは、私には思われない。そこで私は君を、私の心安い宿屋に紹介する。宿屋では私に対する信用で、君を泊まらせて食わせて置く。その間に私は君のために位置を求める。それも、君だけの材能があつて見れば、多少の心こころ当あたりがないでもない。若し旨うまく行つたら、君は自ら贏かち得た報酬で宿屋の勘定をするが好い。それが旨うまく行かず、又故郷からも金が来なかつたら、宿屋の勘定だけを私が引き受ける。私にはそれ以上の約束は出来ない。それで好いかと、私は云つた。

F君は私の詞ことばを聞いて、少し勝手が違うように、予期に反したように感じたらしかつたが、とにかく同意した。多分君は私が許諾するか、拒絶するかと思つていただろう。それに私の答は許諾でもなければ、拒絶でもなかつたから、君のためには意外であつたかと思われる。とにかく君は、格別難ありがた有がたがる様子もなく、私に同意した。

私は使を遣つて下役の人を呼んで、それに用事を言い含めた。そしてF君を連れて、立た見ちみと云う宿屋へ往かせた。立見と云うのは小倉停車場に近い宿屋で、私がこの土地に著ついた時泊つた家である。主人は四十を越した寡婦かふで、狎ちんを可哀がつている。怜れい惻じつで、何の話

でも好くわかる。私はF君をこの女の手に托したのである。

私がF君に多少の心当があると云つたのは、丁度その頃小倉に青年の団体があつて、ドイツ語の教師を捜していたからである。そこで早速その団体の世話人に話して、君を聘^{へい}することにさせた。立見の勘定は私が払わなくても好いことになった。

F君は殆^{ほとんど}毎日のように私の所へ遊びに来た。話はドイツ語の事を離れぬが、別に私に難問をするでもない。新に得た地位に安んじて、熱心に初學者にドイツ語を教える方法を研究して、それを私に相談する。そう云う話を聞くうちに、私は次第に君と私とのドイツ語の知識に大分相違のあることを知つた。それは互に得失があるのである。君は語格文法に精^{くわ}しい。文章を分析して細かい事を云う。私はそんな時に始めて聞く術語に出くわして驚くことがある。しかし君の書いたドイツ文には漢學者の謂う和習がある。ドイツ人ならばそうは云わぬと、私が指^{してき}する。君が服せぬと、私は旅中にも持っているReclam版のGoetheなどを出して証拠立てる。こんな応対がなかなか面白いので、私も君の来るのを待つ

ようになった。

天気の良い土曜、日曜などには、私はF君を連れて散歩をした。狭い小倉の町は、端から端まで歩いて歩き足らぬので、海岸を大里まで往ったり、汽車に乗って香椎の方へ往ったりした。格別読む暇もないのに、君はいつも隠しにドイツの本を入れて歩く。Goesch 版の認識論や民類学などである。なぜかと問うと、暇があったら読もうと思うのが楽しみだと、君は答える。ひどく知識欲の強い人である。

二三週間立つてから、或る日私はF君がどんな生活をしているかと思つて、役所からの帰掛に立見をおとずれた。丁度お上さんが門口から一匹の小犬を逐い出しているところであつた。「どうも内の狛が牝だもんですから、いろんな犬が来て困ります」と云つて置いて、「畜生々々」と顧み勝がちに出て行く犬を叱っている。狛は帳場から、よそよそしい様子をして見ている。

「F君はどうしていますか」と、私は問うた。

「あなたがお世話なさるだけあつて、変つた方でございますね」と、お上さんは笑顔をして云つた。

「わたくしが世話をするだけあつて変つていのですつて。それは困るなあ。一体どう変

つています。「こう云いつつ、私は帳場の前に腰を掛けた。

「いいえ、大そう好い方でございますが、もうこんな朝晩寒くなりましたのに、まだ単ひ物とえもの一枚でいらつしやいます。寒い時は、上からケツトを被かぶつて本を読んでいらつしやるのでございます。」お上さんは私に座布団を出して、こう云つた。

「はてな。工面が悪いのかしら。」独ひとりごと言ことのように私は云つた。

「そうじやございません。お泊になつてから少し立ちますと、今なら金があるからと仰おつしつて、今月末までの勘定を済ませておしまいになつた位でございます。」もう十一月に入つているから、F君は先月青年団から貰つた金で前払をしたのである。

とにかく逢つて見ようと思つて、私は二階へ上がった。立見の家では、奥の離座敷上等の客を留めることにしている。次は母屋おもやの中庭に向いた二階である。表通に向いた二階の小部屋は、細かい格子の窓があつて、そこには客を泊らせない。F君は一番安い所で好いと云つて、そこに落ち著いた。

「F君、いるかね」と云つて声を掛けると、君は内から障子を開けた。なる程フランネルのシャツの上に湯帷子ゆかたを著ている。細かい格子に日を遮さえぎられた、薄暗い窓もとの下に、手習机はなの古いのが据えてあつて、そこが君の席になつている。私は炭団たじんの活けてある小火鉢はさを挟

んで、君と対座した。

この時すぐに目を射たのは、机の向側に夷麦酒えびせいるの空箱がたて竖に据えて本箱にしてあることであつた。しかもその箱の半以上を、茶褐色の背革の大きい本三冊が占めていて、跡は小さい本と雑記帳とで填うまっている。三冊の大きい本は極新ごくしい。薄暗い箱から、背革に記してある金字が光を放っている。私は首を屈かがめて金字を讀もうとした。

「Meyerの小ですよ」と、F君が云つた。

「そうか。ひどく立派な本になつたね。それに僕の持つてゐるのは二冊物だが。」

「それは古いのです。これは南江堂に來たのを見て置いたから、郵便為換かわせを遣やつて取り寄せました。」

「しかしこんなに膨ぼ脹ちようしては、名は小でも、邪魔になるね。なぜわざわざ取り寄せたのだ。」

「なに、教師をしていると、人名や地名の説明を求められますから、この位な本がないと、心細いのです。」

F君と私とは会話辞書の話をした。MeyerとBrockhausとの得失を論ずる。こう云うドイツの本がLarousseやBritannicaと違ちがう所以ゆえんを論ずる。俗書が段々科学的の書に接近して

来る風潮を論ずる。とうとう私はランプの附くまでいて歸った。

私は借家に帰ると、古^{ふる}裕^{あわせ}を一枚女中に持たせて、F君の所へ遣った。五十日分の宿料を払つて、会話辞書を買つては、君の貰つた月給は皆無くなって、煙草もやたらには吞まれぬわけだと思つたからである。

私はF君の徼幸者の一面があると思つていたので、最初から君と交わるに、多少の距離を保留して置くようにした。しかし相識になつてから時が立つに従つて、この距離が段々縮まつて来た。

それには衣食に事を闕^かいても書物を買うと云う君の学問好を認めためもあるが、決してそればかりではない。ドイツ語に於ける君の造^{ぞうけい}詣^{けい}の深いことは、初対面の日にもう知れていた。そうして見れば、君が学問好だと云うことは、問わずして明かなわけである。

F君と私との距離を縮めた、主な原因は私が君の「童貞」を発見した処に存ずる。君が殆ど異性に関する知識を有せぬことを発見した処に存ずる。これは或は私の見^み錯^{あやま}りであ

つたかも知れない。しかし私は今でも君に欺かれたとは信ぜない。

私はF君に秘密が無かつたとは思わない。又君がうそ嘘を衝かなかつたとは思わない。しかし君は故らことごとに構えて嘘を衝く人ではなかつたらしい。嘘のために詞ことばを設ける程の面倒をせぬ人であつたらしい。私と対座して構えて嘘を衝いて見るが好い。私はすぐに強烈な反感を起す。これは私の本能である。私はこの本能があるので、余り多く人に欺かれない。多数の人を陥れた詐偽師を、私が一見して看破したことは度々ある。

これに反して義務心の闕けた人、*amoral*な人、世間で当にならぬと云う人でも、私と対座して赤裸々に意志を発表すれば、私は愉快を感じる。私は年久しくそう云う人と相あいさ忤からわずに往来したことがある。

さて私は前にも云つた通りに、最初から徼幸者を以てF君を待った。しかし君の対話は少しも私に反感を起させたことが無い。君の言語は衝動的である。君の胸臆は明白に私の前に展開せられて時としては無遠慮を極めることがある。*Verblüffend*に真実を説くことがある。私はいつもそれを甘んじ受けて、却つて面白く感じた。

殆ど毎日逢つて、時としては終日一しよに在ることさえあるので、F君と私との話はドイツ語の事や哲学の事には限らぬようになった。或る日私は君にこう云う事を言った。私

はこの土地で役をしていて多くの人に知られている。その人達がもうF君をも知って来た。そして二人を兄弟だと云うそうである。本通の雜貨店徳見に往ったら、「弟御さんも店へお出いでになりました」と、主人が云った。誰の事かと思つて問えば、君の事である。同国ではあるが、親類ではないと、私は答えた。主人は不審に思うらしい様子で、「へえ、あんなに好く肖にてお出になつて」と云つた。私は君に似ているだろうか、君はどう思うと云つて、F君を見た。

F君がその時、それは他人の空似と云うことが随分有るものと見えると云つて、こういう話をした。君が尾の道に泊つた晩の事である。中庭を囲んだ二階の一方にある座敷に、君は入れられた。すると二階の向側に泊つた客が、芸者を大勢呼んで大騒をしていた。君は無ぶり聊りょうに堪えぬので、廊下に出て向うを見る。向うでも芸者が一人出て、欄干に手を掛けてこつちを見る。その芸者が連つれの芸者を呼び出す。二人で何かささやいてこつちを見る。こつちで見るのは好いが、向うから見られるのは厭いやだと思つて、君は部屋に這はい入つた。向側の騒ぎは夜遅くなるまで続いた。君は床に這入つて、三味線さみせんの声をやかましく思いつつ寐ね入つた。暫く寐ているうちに、部屋に人が来たように思つて目を醒さました。見れば芸者が来て枕元にすわっている。君は驚いて起き上がった。そして「どうしたのだ」と問うと、

「少し伺いたい事がございます」と云う。君は立つて夜具を畳んだ。それから芸者に用事を尋ねた。芸者の口上はこうであつた。自分は向側の座敷に、大勢来て泊っている芸者の中の一人である。この土地の生れで、兄が一人あつた。それが家出をして行方が知れずにいる。然るに先刻向側からあなたを見て、すぐにその兄だと思つた。分れてからだいぶ年が立つたが、毎日逢いたい逢いたいと思うので、こつちでは忘れずにいる。あなたを見た時、すぐに馳けて来ようかと思つたが、人目があるのでこらえていた。若し人違ひとちがえであつたら、許して貰いたい。恋しい兄だという思う人を見たのに、逢つて物を言わずに別れては、後々まで残惜しい。一体あなたはどちらのお方かと云うのであつた。君はこう答へた。

「それは気の毒な事だ。僕は石州のもので、尾の道へは始めて来た。ここへ来たのが知れるといけないから、早く帰るが好い」と云つたと云うのである。

F君のこの話を、私は面白く思つて聞いた。私の悟性から見れば、初め君が他人の空似は有るものだと云つたのは反語でなくてはならない。芸者が臥所ふしどへ来た時、君は浜路はまじに襲われた犬塚いぬづか信乃しののように、夜具を片附けて、開き直つて用向を尋ねた。さて芸者の詞を飽くまで真面目に聞いて、旨く敬して遠ざけたのである。君が語り畢おわる時、私は君の面おもてを

凝視して、そこに Ironie の表情を求めた。しかしそれは徒事いたずらごとであった。

F 君は芸者の詞を真実だと思つて、そのまま私に話したのであった。私は驚いた。そして云つた。「日本の女は横著おうじやくなようで、おとなしい。それが西洋人であつたら、きつと肉迫して来たのだ。すると君だつて、Wilhelm が Phlene の胸を押し退けるの勇気がなかつたように、女の俘とりこになるのだつた。」

私がこう云うと、今度は F 君が驚く番になつた。後に聞けば、或る西洋人に戒められて、小説と云うものを読まぬ君も、Wilhelm Meister や Geistesher 位は知つていたので、私の詞を聞いて、白内障の手術を受けたように悟つたのださうである。

この事があつてから私は、F 君の異性に対する言動に、細かに注意した。そして君がこの方面に於いて全く無経験であることを知つた。君は衣食の闕乏けつぼうを憂えない。君は性慾を制している。君は尋常の徼幸者とは違ふ。君はとにかくえらいと、私は思った。そこで初め君との間に保留して置いた距離が次第に短縮するのを、私は妨げようとはしなかつた。私の鑑識は或は錯あやまつていたかも知れない。しかし私は今でも君に欺かれたとは信ぜない。

十二月になった。私が小倉に来てから六月目、F君が私の跡を追って来てから三月目である。私はフランス語の稽古を始めて、毎日夕食後に馬借町の宣教師の所へ通うことになった。

これが頗る私と君との交際の上に影響した。なぜかと云うに、君が尋ねてきても、私はフランス語の事を話すからである。君は、「フランス語も面白いでしょうが、僕は二つの語を浅く知るより、一つの語を深く知りたいのです」と云う。「また一説だね」と、私は云う。この背面には、そうばかりは行かぬと云う意味がある。君はそれを察する。そして多少気まずく思う。その上余り頻りに往来した挙句に、必然起る厭倦の情も交つて来る。そこで毎日来た君が一日隔てて来るようになる。二日を隔てて来るようになる。譬えて言えば、二人は最初遠く離れた並行線のように生活していたのに、一時その距離が逼り近づいて来て、今又近く離れた並行線のように生活することになったのである。

F君はドイツ語の教師をして暮す。私は役人をして、かたわら旁フランス語の稽古をして暮す。そして時々逢つて遠慮のない話をする。二人の間には世間並の友人関係が成り立ったのである。

翌年になった。四月の初にF君が来て、父の病気のために帰省しなくてはならぬから、旅費を貸して貰いたいと云った。幾らいるかと云えば、二十五円あれば好いと云う。私はすぐに出してわたした。もう徼幸者扱にはしなかつたのである。この金の事はその後私も口に出さず、君も口に出さずじまつた。私は返して貰う事を予期しなかつたのである。君は又そんな事に拘泥せぬ性分であつたのである。これは横著なでも、しらばつくれたのでもない、私は思つていた。年久しく交際した君が、物質的に私を煩わづらわしたのは只これだけである。

程なくF君は帰つて来て、鳥とり町まちに下宿した。そしてこれまでのようにドイツ語の教師をしていた。夏の日には私は一度君を尋ねて、ラムネを馳走せられたことがある。

年の暮に鍛冶町の家主が急に家賃を上げたので、私は京町へ引き越した。いとぐるま車の音のする家から、太鼓の音のする家に移つたのである。京町は小倉の遊女町の裏通になつていて、絶えず三味線と太鼓が聞えていた。この家へもF君は度々話しに来た。

又年が改まった。私が小倉に来てから三年目である。八月の半頃に、F君は山口高等学校に聘^{へい}せられて赴任した。

その又次の年の三月に、私は役が變つて東京へ歸つた。丁度四年目に小倉の土地を離れたのである。

私は無妻で小倉へ往つて、妻を連れて東京へ歸つた。しかし私に附いて来た人は妻ばかりではなくて、今一人すぐに跡から来た人がある。それはまだ年の若い僧^{そうりよ}侶で、私の内では安^{あん}国^{こくじ}寺さんと呼んでいた。

安国寺さんは、私が小倉で京町に引き越した頃から、毎日私の所へ来ることになった。私が役所から歸つて見ると、きつと安国寺さんが来て待つていて、夕食の時までいる。この間に私は安国寺さんにドイツ文の哲学入門の訳読をして上げる。安国寺さんは又私に唯識論の講義をしてくれるのである。安国寺さんを送り出してから、私は夕食をして馬借町の宣教師の所へフランス語を習いに往つた。

そんな風であったから、私が小倉を立つ時、停車場に送ってくれた同僚やら知人やらは非常に多かつたが、その中で一番別を惜んだものは安国寺さんであった。「君がいなくなつては、安国寺さんにお気の毒だね」と、知人は擲揄ちやくかい半分はんぶんに私に言った。

果して安国寺さんは私との交際を絶つに忍びないので、自分の住職をしていた寺を人に譲つて、飄ひょうぜん然ぜんと小倉を去つた。そして東京で私の住まう団子坂上の家の向いに来て下宿した。素もとと私の家の向いは崖がけで、根津ねづへ続く低地に接しているので、その崖の上には世に謂いう猫の額程の平地しか無かつた。そこに、根津が遊郭ゆうかくであつた時代に、八幡楼やはたろうの隠居いんきょのいる小さい寮があつた。後にそれを買かい潰つぶして、崖の下に長い柱を立てて、私の家と軒が相對するような二階家の広いのを建てたものがある。眺望の好かつた私の家は、その二階家が出来たために、陰気な住いになった。安国寺さんの来たのは、この二階造の下宿屋である。

しかし東京に歸つた私の生活は、小倉にいた時とは違つて忙しい。折角来た安国寺さんは前のように私と知識の交換をすることが出来ない。それを残念に思つてみると、丁度そこへF君が来て下宿した。東京で暮そうと思つて、山口の地位を棄てて来たと言ふことであつた。

そこで安国寺さんは哲学入門の訳読を、私にして貰う代りに、F君にして貰おうとした。然るに私とF君とは外国語の扱方が違う。私は口語でも文語でも、全体として扱う。F君はそれを一々語格上から分析せずには置かない。私はKoberさんの哲学入門を開いて、初のペエジから字を逐つて訳して聞せた。しかも勉めて仏經の語を用いて訳するようにした。唯識を自在に講釈するだけの力のある安国寺さんだから、それを丁度尋常の人がEIBや読本を解するように解した。F君はこの流義を踏襲することを肯ぜずに、安国寺さんに語格から教え込もうとした。安国寺さんは全く違った方面の労力をしなくてはならぬので、ひどく苦しんだ。

暫く立つて、F君は第一高等学校に聘せられたが、矢張同じ下宿にいて、そこから程近い学校に通うので、君と安国寺さんとの関係は故のままであつた。

私が東京に帰ってから、桜が咲き桜が散つて、気候は暖いと云う間もなく暑くなった。二階に登つて向いの下宿屋を見れば、そこでも二階の戸を開け放っている。間数が多いの

で、F君や安国寺さんのいる部屋は見えない。見えるのは若い女学生のいる部屋である。欄干に赤い襟えりうら裏の附いた著物きものや葡萄茶えびちやの袴はかまが曝さらしてあることがある。赤い袖の肌襦はだじゆ袴ばんがしどけなく投げ掛けてあることもある。この衣類ぬしの主ぬしが夕方には、はでな湯帷子ゆかたを著て、縁端えんばなで涼んでいる。外から帰って著物を脱ぎ更かえるのを不意に見て、こつちで顔を背そむけることもある。私はいつとなくこの女の顔を見覚えたが、名を聞く折もなく、どこどこの学校に通うと云うことを知る縁もなかつた。女は美しくもなく、醜みにくくもなく、何一つ際立って人の目を惹ひくことのない人であつた。

向いの家の下宿人は度々入り替ると見えて、見知つた人がいなくなり、新しい人が見えるのに気の附くことがあつた。しかしF君と安国寺さんとは外へ遷うつらずにいた。私の家の二階から見える女学生も遷うつらずにいた。

一年余立って、私が東京へ帰ってからの二度目の夏になった。或る日安国寺さんが来て、暑中に帰省して来ると云つた。安国寺さんは小倉の寺を人に譲つたが、九州鉄道の豊ほうしゆ

州^う線の或る小さい駅に俗縁の家がある。それを見舞いに往くと云うことであつた。

安国寺さんの立つた跡で、私の内のものが近所の噂^{うわさ}を聞いて来た。それは坊さんはF君の使に四国へ往つたので、九州へはその序^{ついで}に帰るのだと云うことであつた。使に往つた先は、向いに下宿している女学生の親元である。F君は女学生と秘密に好い中になつていたが、とうとう人に隠されぬ状況になつたので、正式に結婚しようとした。それを四国の親元で承引しない。そこで親達を説き勧めにF君が安国寺さんを遣^やつたと云うのである。

私はそれを聞いて、「安国寺さんを縁談の使者に立てたとすると、F君はお大名だな」と云つた。無遠慮なEgoistたるF君と、学徳があつて世情に疎^{うと}く、赤子の心を持つている安国寺さんとの間でなくては、そう云うことは成り立たぬと思つたのである。

安国寺さんの誠は田舎の強情な親達を感動させて、女学生はF君の妻になることが出来た。二人は小石川に家を持つた。

又一年立つた。私はロシアとの戦争が起つたので、戦地へ出発した。F君は新橋の停車

場まで送つて来て、私にドイツ文で書いたロシア語の文法書を贈った。この本と南江堂で買ったロシア、ドイツの対訳辞書とがあつたので、私は満州にいる間、少なからぬ便利を感じた。

私が満州で受け取つた手紙のうちに、安国寺さんの手紙があつた。その中に重い病氣のためにドイツ語の研究を思い止まつて、房州辺の海岸へ転地療養に往くと云うことが書いてあつた。私はすぐに返事を遣つて慰めた。これは私の手紙としては、もつとも最長い手紙で、世間で不治の病と云うものが必ず不治だと思つてはならぬ、安心を得ようと志すものは、病のために屈してはならぬと云うことを、譬喩談ひゆだんのように書いたものであつた。私は安国寺さんが語学のために甚だしく苦しんで、その病を惹き起したのではないかと疑つた。どんな複雑な論理をも容易たやすく辿たどつて行く人が、却つて器械的に諳そらんじなくてはならぬ語格の規則に悩まされたのは、想像しても氣の毒だと、私はつくづく思つた。

満州で年を越して私が凱旋がいせんした時には、安国寺さんはもう九州に歸つていた。小倉に近い山の中の寺で、住職をすることになつたのである。

F君は相変らず小石川に住んで、第一高等学校に勤めていた。君と私の忙しい生活は、互に訪問することを許さぬので、私は時々巢鴨すかも三田線の電車の中で、君と語を交えるに過

ぎなかつた。

それから四五年の後に私は突然F君の訃音ふいんに接した。
なつたと云うことである。

咽頭いんとうの癌腫がんしゅのために急に亡なく

青空文庫情報

底本：「新潮日本文学」 森鷗外集」 新潮社

1971（昭和46）年8月12日発行

入力：柿澤早苗

校正：湯地光弘

1999年10月16日公開

2006年5月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二人の友

森鷗外

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>